

## 海外生活と子どもの健康

### 第7回 海外生活とけいれん

鈴木こどもクリニック

院長 鈴木 洋

#### <はじめに>

病院勤めで当直をしていた時、患者さんから「今子どもがけいれんしている。どうしたらいいか」という電話がありました。私は「すぐ連れてきてください」と返事しました。すると「ドイツのフランクフルトにいるのですが」と返ってきました。子どもの突然のけいれん、お母さんは藁にもすがる思いで日本にいたとき受診していた病院に国際電話をしたのです。さっきまで普通にしていた子どもの顔色が変わり全身を震わせるけいれんをすれば見慣れない人にとってはものすごく恐ろしい出来事でしょう。今回はこのけいれんについて海外生活を踏まえてお話したいと思います。

#### <まずは熱性けいれんから>

子どもに多いけいれんは熱性けいれんです。日本人では7~8%の子どもにみられます。字のごとく熱がありけいれんする病気ですが大人にはありません。5, 6カ月から5, 6歳の子どもが38度以上の熱がある時けいれんをすれば「熱性けいれん」と診断します。但し熱の原因が髄膜炎や脳炎のように脳に病気があるとき、また代謝性疾患があるときは除外します。熱が急上昇するときに起こりやすいのでけいれんが起こってから熱に気づくこともあります。ほとんどの場合熱が出てから24時間以内に起こるようです。熱が出てから2, 3日後にけいれんするときには髄膜炎や脳炎などより重い病気を考えなくてははいけません。けいれんはほとんどの場合、5分以内に止まりその後寝てしまいます。一応けいれんが10分以上続くときは速やかに止める処置をしなければいけません。夜中であろうと医療機関の受診を勧めます。親や兄弟が子どもの頃熱性けいれんをした既往のある子どもはそうでない子どもより起こす確率が高いので遺伝的傾向があるようです。熱性けいれんの経験のある子どもの30~50%は2回以上起こすようです。反対に言えば半分の子どもは1回だけと言うことになります。けいれんを起こしているときは非常に怖いと感じますが熱性けいれんは将来運動、知能にはほとんど影響しない予後のいいものです。但しけいれんが長く続いたときには脳に影響を残すことが希にあります。

熱があるとけいれんを起こすのではと熱冷まし(解熱剤)を使いたくなりますが熱冷ましではけいれん予防にならないと言われていました。けいれん予防はけいれん止めです。日本では2回以上熱性けいれんをおこすと商品名ダイアアップ座薬(ジアゼパム)を37.5~38度になったらお尻に挿入し、8時間後にまだ38度以上あるときに2回目を入れます。このけいれん止めの座薬を使うか使わないかはその場にいる親の判断ですが、不安があれば使うことでとりあえず安心できるようです。特に海外生活では熱性けいれんの既往のある子どもには常備薬として持参してもよいと思います。

熱性けいれんを初めて見ると親だけでなく若い小児科医も動揺するものです。特に夜お父さんが仕事でまだ帰宅していないときに子どもが顔色を変えてけいれんすればとても怖

いものです。海外にいればなおさらです。冒頭に海外から電話があったのもそのためでしょう。若い小児科医は自分が医師と言うことを忘れ親と同じようにおどおどするようです。経験のある小児科医は多くの熱性けいれんの子もたちを診ているので落ち着いて対応します。その親と医師との意識のギャップが時に医療不信にもなります。経験から親を安心させるのならいいのですが病院に着いた時には多くの場合けいれんが止まっているので軽くあしらうことがあるのです。親の気持ちをくみ取ることも大事な医療行為です。親の「心臓が止まる思い」と医師の「またか」の意識の差です。

#### <けいれんは救急医療>

咳や鼻水で小児科を受診し「風邪」と診断されることはよくあることです。しかしそのときの医師の言葉を注意して聞くと「風邪でしょう」「たぶん風邪」と曖昧に言っていることが多いと思います。「風邪です」とはっきり言う小児科医はそれほど多くないのです。風邪は治って初めて言える病名なのです。その結果「風邪は万病の元」という言葉もあるのです。熱性けいれんもこの風邪と同じことが言えます。初めての熱性けいれん、熱がありけいれんがあるので「たぶん熱性けいれんでしょう」と言いますが確定ではありません。熱性けいれんは予後のいい病気ですが髄膜炎や脳炎・脳症は重篤な病気です。出来るだけ早い治療が必要です。ですから熱があっても初めてのけいれんであれば速やかに医療機関を受診しなければなりません。まれですが重篤な病気の初期かもしれないからです。又けいれんが10分以上長く続いたり、止まっても再発するときには急を要します。けいれんは救急医療の一つです。けいれんの症状は高熱の場合以上の救急です。

子どもと海外に赴任する場合の原則ですが救急医療のシステムは国によっていろいろです。救急車を呼ぶときもいろいろです。前もってその国のやり方を聞いておくことはとても大事なことです。中国に行ったとき日本の方が救急車で病院を受診したのですが断られたことがあったようです。日本では病院へ救急車で行った場合絶対です。お金があろうとなかろうと急病は絶対なのですが、中国のそのケースではまず料金の前払いをしなければ診察してくれなかったようです。

救急医療は災害医療と同じようにトリアージ（患者の状態を重症、中等症、軽症に分ける作業）が原則です。命の危険度が高い即治療をしなければいけない重症、命を気にする必要はないが入院して治療が必要な中等症、そして帰宅して経過をみていい軽症に分けます。熱性けいれんは一般的には軽症ですが熱性けいれんと断定できないけいれんの時は重症の可能性や入院して経過を見なければ判断できない場合があるのです。初めてのけいれん、けいれんが止まらない時は休日や診療時間外の時は救急として受診しなければいけません。

#### <他のけいれん疾患>

##### \*てんかん

熱性けいれんの次に多いけいれんは「てんかん」です。0.7%の子どものにあります。けいれんを予防する抗けいれん剤（てんかんの場合は抗てんかん剤とも言います）を飲んでいきます。慢性の病気なので日本で診断されけいれん止めを飲んでい人もいでしょう。海外で初めて診断されることもあります。てんかんは非常に幅の広い病気です。現在はけいれんをコントロールできる薬が多くあり、きちんと医師と相談しながら病気とつきあうことが出来ます。日本の医師に診てもらっている子どもたちは海外に行っても医師との間にホットラインのようなものを医師の了解のもとつくられるといいと思います。ネットでも電話で

もできると思います。海外で診断され治療が始まったら不安のあるかたは今までお世話になった小児科医にセカンドオピニオンとして相談されたり日本の小児神経の専門医を紹介してもらってもいいでしょう。日本でてんかんと診断され抗てんかん剤を服用しているときは海外の医師にもわかる英文の病歴や投薬内容を書いてもらうといいでしょう。

#### \* 脳症・脳炎と髄膜炎

小児科で一番注意しなければいけないけいれんは**脳症・脳炎と髄膜炎**です。細菌性髄膜炎はその原因細菌に対する予防接種（ヒブワクチン、肺炎球菌ワクチン）が行われ非常に少なくなっています。一方脳症・脳炎はインフルエンザ脳症を始め突発性発疹の原因ウイルスであるヒトヘルペスウイルス 6、ロタウイルス、RS ウイルスによるものがあります。これらは多くの場合けいれんを伴いしかも熱があることが多いのです。ですから熱があり、けいれんしたからと言って初めての時は安易に熱性けいれんとして対応してはいけません。これらのけいれんを伴う脳症は出来るだけ早く脳を守る治療をしなければいけません。

#### \* 憤怒けいれん、泣き寝入り引きつけ

**憤怒けいれん**または**泣き寝入り引きつけ**もけいれんの一つです。2, 3 歳までの子どもが泣いた後呼吸がはき出せなくなり顔色が紫色（チアノーゼと言います）になりさらに続くと全身が海老反りになるのです。息を吐き出せるようになると全身がピンクとなり泣き声が出てきます。空気を吸ってはくというプロセスが感情によってうまくコントロールが出来なくなり、結果として海老反りになり突っ張るようなけいれんが起きるのです。見た目にはいやなものですが悪いものではありません。年が経つにつれなくなります。

#### <けいれんいろいろ>

けいれんかどうかの判断は難しいものです。けいれんは連続した動作がなくなり「あれ？」とか「どつきり」とした感じになる現象です。要するに考える余地を与えないで胸に恐ろしさを惹起させる出来事です。よく間違えるものとして熱が上がるときの震えがあります。**悪寒戦慄**といって体の筋肉を振るわせることで熱を体が作っている現象をけいれんと勘違いすることがあります。日本にいればかかりつけの小児科医に会い、気楽に相談出来ますが、海外ではそうはいきません。海外では、熱とともに震度5以上の地震に遭ったようなどつきり感があれば速やかに現地医療機関を受診した方がいいと思います。そうでなければ少し様子を見てかまわないと思います。

最後にけいれんとともに意識状態のチェックも大事です。意識障害も軽いと判断は難しいですがいつもと行動がおかしければ問題です。

#### <おわりに>

子どもは大人に比べけいれんを起こしやすいようです。けいれんを起こすのを抑制するシステムが十分発達していないからです。全身性硬直性間代性けいれんはいわゆる全身を突っ張りその後がたがた震わせるけいれんです。一度見れば忘れられるものではありません。しかし初めての場合は怖さ、心臓が止まる思いなど親がパニック状態になりやすいようです。冷静に対応は出来にくいのですがけいれんが全身なのか部分的なのか左右差があるかどうかなど出来れば観察すると後に役立ちます。また持続時間は実際は短いのですがすごく長く感じます。その持続時間を出来れば把握するといいでしょう。そして子どものけいれんは大事な救急医療対象です。海外にいても躊躇なく受診することを勧めます。